

小学生を対象とした Death Education の実践・評価と課題

— 小学4年生の記述内容の分析より —

A Study on Death Education for Elementary School -Aged Children — Qualitative Analysis of Children's Report —

荃 津 智 子¹⁾

Tomoko KUKITSU

岡 田 洋 子²⁾

Yoko OKADA

菅 野 予 史 季²⁾

Yoshiki SUGANO

井 上 ひ と み³⁾

Hitomi INOUE

井 上 由 紀 子⁴⁾

Yukiko INOUE

志 賀 加 奈 子²⁾

Kanako SHIGA

This study discussed how to do Death Education for school-aged children and evaluated intervention in Death Education. The subjects were 80 children - the 4th grade of elementary school. As the teaching material for Death Education a documentary film was prepared; the story of a school-aged boy living and fighting against his disease. The subjects wrote two reports about "the meaning of life" or "life now", before and after of the Death Education. Their reports were analyzed using the constant comparative method. Analysis revealed that there were four major categories before intervention (#1-4), and five major categories after intervention (#5-9). 1.the preciousness of life, 2.their feelings about daily life, 3.their thought about life and death regarding other person's circumstances, 4.the significance of life and death, 5.the absurdity of death, 6.their new leaning about the preciousness life, 7.their impression about living and life, 8.attitudes to life, 9.their emotional response to the unreasonable death of other.

As a result, compared with categories before and after intervention, children have an opportunity to think and to feel about "life", "death" and "daily life" more familiarly after the intervention. This teaching material for Death Education was easy to comprehend for them, because the character in the film was a school-aged child of the same generation. It was extrapolated that children were concerned about "life", "death" and "daily life", but they had no chance to talk or reflect about this theme with their families, teachers or friends. We still have to continue to discuss and evaluate methods of Death Education, but in greater dialogue about this theme with children.

Key words: Death Education, Elementary school-aged children,
Evaluation of Death Education, Qualitative Analysis

1) 天使大学 看護栄養学部 看護学科

(2004年12月7日受稿、2005年3月2日審査終了受理)

2) 旭川医科大学 医学部 看護科

3) 石川県立看護大学 看護学部 看護学科

4) 札幌医科大学大学院 保健医療学研究科 看護学専攻

I. はじめに

現代社会において子どもたちは、テレビ、ゲーム等を通じたバーチャルな死との出会を実際の体験に先行して体験することが多く、このことが子どもたちの生活に影響をもたらしている¹⁾と指摘されている。また、次々と報道される青少年が加害者となった生き物や人間への残虐な事件や子どもの自殺などから、子どもたちが命や死をどのように考えているのかを問われることが多い社会ともいえる。このような中で生きてくても生きられない子どもたちを見送ってきた筆者らにとっては、子どもとともに命や死の問題を考える Death Education のあり方を検討することは、課題の一つであった。

Death Education を検討するにあたり本研究に先行して子どもが生や死についてどのような体験をしているのか、死をどのように理解しているのかとの視点から、筆者らは²⁾『子どもの「アニメズム・死の概念発達」と生活体験』(1998~2001)に関する調査を北海道・関東・九州の小学生、中学生2,662名を対象に実施した。その結果ベットの死別体験は、小学生・中学生で68.3~76.6%が体験しており、身近な人との死別体験では、小学生低学年54%、小学生高学年66.6%、中学生69.1%が体験していた。さらに葬式への出席や墓参り体験でも、小学生6割、中学生8割が体験しているという結果であり、岡田³⁾による10年前の結果と比較し大きな変化はなく、子どもにとって死にまつわる出来事が子どもの生活から減少しているという状況とはいえない。また、死の概念理解に関しては、死の不可逆性に関して小学生低学年58.2%、高学年52.6%、中学生48%が「死んだら生き返らない」と答える一方、わからないと答えた小学生高学年、中学生は29%であった。「死んだ人を生き返らせることができるか」の問いには、いいえと答えたものは小学生低学年81.9%、高学年77.9%、中学生67%と学年が進むにつれ減少するという傾向が見られている。また死の不可避性に関しても、低学年23.6%、高学年・中学生11%が、病気や事故にあわなければ死なずにずっと生きていられると答えている。一般にこれらの死の概念の理解は、9歳前後にほぼ成人と同様の理解を示すといわれているが、筆者らの研

究結果からは、従来死の概念としての不可逆性や普遍性(不可避性)を理解するといわれる年代においてもわからないなどの回答が多いことが明らかになった。その背景については検討が急がれるところではあるが、子どもたちが、死別体験や死について家族や友人と話し合うという経験は少ないという結果も出ている。子どもを取り巻く社会の変化やバーチャルな世界の影響により子どもが死を実感する機会が少なく、生や死への意識が希薄になりつつあるという指摘は説得力を持つが、子どものみならず子どもを取り巻く大人が、死を身近な問題として子どもと語り合う機会を持つことが少なくなっているのではないかと考えられる。そのような状況の中で、子どもは現実の体験の意味や思いを表現する機会やそれらを身近なものとして共有することが少なく、子どもが命や生きるということそのものと向き合う機会を失うことになっているのではないかと考える。子どもへのDeath Educationへの取り組みは、欧米では様々な教材⁴⁾⁵⁾⁶⁾もあり早くから取り組まれている。しかし、わが国では子どもへのDeath Educationは、個々人や学校での努力によって取り組まれているもの⁷⁾⁸⁾⁹⁾が中心で系統的な取り組みやその効果を子どもの反応などから評価されているものは少ないのが現状である。大人が、子どもとともに命や死の意味を考える機会を持つことは重要な意義があると考え本研究に取り組んだ。

II. 目 的

1. 子どもに「命の大切さ」「生きること」「死について」どのように教え学ぶのかというDeath Educationの指針と具体的方略を検討する。
2. 検討したDeath Educationの実践とその評価を行う。

III. 方 法

1. 対象者
北海道内A市小学校4年生 2クラス80名
2. 研究期間
平成13年4月~16年3月 (Death Educationの実施 平成15年9月)
3. Death Education実施方法
1) 教材の選定、作成までの経過

わが国における Death Education の取り組み例や「いのち」「死」をテーマにしている絵本などの検討を行う。さらに小児看護を実践してきたものの立場から行う Death Education の意義について検討を行った。その結果、以下の視点から方法、教材を作成することとした。

- (1) 対象の子どもの認知的発達段階および死の概念発達段階を考慮すること
- (2) 教材の作成に病気・入院などに関するテーマを積極的に取り入れ活用すること
- (3) (2)のテーマの内容は具体的事象であることおよび対象の子どもにとって同年代の者の経験またはその家族、兄弟姉妹であるものの経験をできるだけ取り入れること
- (4) 病気・入院というテーマを「いのち」「生きること」について考える出発点とするものであること

2) 教材

ドキュメンタリー番組「たかしちゃんありがとう」の内容を15分程度に編集したビデオ。ビデオの内容は、病気を抱えながら、亡くなる直前まで、学校生活を送り続けていた主人公（12歳男児）が、いくつかの出来事を通して、「命」や「生きること」について感じ、考えながら懸命に生きる姿を描いたものである。

3) 教材の選定理由

小学4年生前後の子どもの認知・思考の特徴は、具体的な思考を中心として身近な問題や具体的に

知覚したことを通して物事をとらえ、思考する特徴がある。そこで、子どもにとってできるだけ身近に思える存在であることが重要である。ドキュメンタリーの主人公の「たかしちゃん」は、対象とする子どもたちと同年代であること、学校生活の様子や友人との関係も紹介されていることから子どもたちにとって身近な出来事で具体性のあるものと考えた。そのたかしちゃんの体験や思いを知ること、感じることを出発点として「いのち」「生きること」を考える第1歩となると考えた。

4) 実際の授業の進め方

はじめに、研究者からの自己紹介、本日の来校の目的について説明を行う。子どもたちには、ビデオ視聴前に「いのち」「生きること」について日頃思っていること、考えていること記述し、ビデオ視聴後にもう一度、「いのち」「生きること」について日頃思っていること、考えていることを記述してもらった。授業の進め方は、表1参照。

4. データ収集

記述データとしてビデオ視聴前後に「いのち」「生きること」について、思うこと・考えていることをA4用紙に自由に記述してもらったものを授業終了後に回収した。

5. 分析方法

帰納的質的方法による質的分析を以下の手順で行った。

- ①記述されたものを文脈ごとにコード化し、概念的ラベル付け（オープン・コーディング）

表1 授業展開

導入 (5分)	①自己紹介②内容について、本時の進め方等の説明 用紙の配布
実施前レポート (10分)	③「命」「生きること」について、日頃思うこと・考えていることをA4用紙に自由記載する。用紙の回収
ビデオ視聴 (2クラス合同) プレイルームにて (15分)	④研究者がビデオ内容の概略を説明した後ビデオ視聴
実施後レポート (10分)	⑤「命」「生きること」について、今思うこと・考えていることをA4用紙に自由記載する。用紙の回収
まとめ (5分)	⑥本時のまとめ、協力への謝辞

②概念化されたものを比較検討し、同様の現象を示しているものを分類、整理（サブカテゴリー化）

③抽象度の高い概念化の試み（カテゴリー化）

6. 倫理的配慮

Death Education 実施に際しては、協力が得られた学校側との打ち合わせの際に実施するビデオを事前に学校長、学年主任、担任に視聴してもらい、その結果道徳教育の位置付けとして実施することとした。実施にあたっては、学校側から「Death Education —死の準備教育」の「死」という言葉には抵抗があることが示され、授業の内容の中で「死の準備教育」という言葉は使用していない。対象の児童の中に身近なまたは大切な人との死と出会って間もない児童の有無や個別な状況に関して担任教諭との打ち合わせを行い、必要時担任教諭が配慮、対応することとした。

また、ビデオ視聴前後のレポートは無記名式で、

思ったことは何でも書いてよいこと、書きたくないと思ったことは書かなくても良いこと、これはテストではないこと、時間の中で書ける範囲でよいことを子どもたちに口頭で説明し実施した。

IV. 結 果

1. 実施時の反応

子どもは、真剣に話を聞きビデオにも熱心に見入っており、前後のレポート記載時もそれぞれが一生懸命書いていた。

2. 実施前の記述内容の分析結果

実施前のレポートから子ども達が「命、生きること」について、日頃どのように考えたり、感じたりしているのかに着目し分析した結果、4カテゴリーが抽出された（第1～第4カテゴリー）。カテゴリーおよびサブカテゴリーについて以下に記述した。抽出過程は表2に示した。

表2 実施前のカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
1. かけがえのない命	1) 大切な一つの命	<ul style="list-style-type: none"> ・命は1番大切 ・一人で一つしかない ・ひとりに2つない ・一つだから大切に生きる
	2) 授かりものとしての命	<ul style="list-style-type: none"> ・神様の授けもの ・神様の贈り物ゆえに大切に生きる
2. 生きている実感	1) 生きている感覚	<ul style="list-style-type: none"> ・生きるしあわせ・すばらしさ ・生きことは笑うこと・おこること ・生きていることの不思議さ ・命のはかなさ ・生きることは嬉しさ・悲しさ
	2) 生きていることを意味する活動	<ul style="list-style-type: none"> ・遊ぶこと・勉強すること ・生きることは動くこと ・生きることは活動（走る、食べる…）
3. 他者の死や存在を通して考える生・死	1) 世界に生きる人々の生と死	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の貧困・飢餓がかわいそう ・世界の一人の死もその家族の悲しみ
	2) 殺人、自殺への思い	<ul style="list-style-type: none"> ・人殺しは絶対いけない ・恵まれている人の自殺
	3) 病気と死	<ul style="list-style-type: none"> ・病気の人がかわいそう ・病気で死ぬ人がかわいそう ・病気の人とその家族もかわいそう
	4) 身近な人の生・死からの思い	<ul style="list-style-type: none"> ・死んだおじいちゃんにはまた会える気持ち ・自分の死は家族に悲しみをもたらす ・家族の死を思うと悲しい ・家族の死から生きること大事
4. 生と死への意味づけ	1) 不可逆的な死	<ul style="list-style-type: none"> ・死んだら戻れない ・寿命での死
	2) 存在することすなわち生	<ul style="list-style-type: none"> ・生きることはこの世に存在すること ・今ここにいることが生きること
	3) 生きる意味	<ul style="list-style-type: none"> ・生きることは人に役立つこと ・生きることは死ぬより大変なこと ・生きることは大変なこと

カテゴリーおよびサブカテゴリー

第1カテゴリー：かけがえのない命

- 1) 大切な一つの命
- 2) 授かりものとしての命

第2カテゴリー：生きている実感

- 1) 生きている感覚
- 2) 生きていることを意味する活動

第3カテゴリー：他者の死や存在を通して考える

生・死

- 1) 世界に生きる人々の生と死
- 2) 殺人や自殺への思い
- 3) 病気と死
- 4) 身近な人の生・死からの思い

第4カテゴリー：生や死への意味づけ

- 1) 不可逆的な死
- 2) 存在することすなわち生
- 3) 生きる意味

以下に各カテゴリーの特徴を具体的データとあわせ述べる。

第1カテゴリー：かけがえのない命

このカテゴリーは、命の大切さや命が唯一無二のものであることを記述したものである。サブカテゴリーとしては、1) 大切な一つの命、2) 授かりものとしての命から構成されている。

1) 大切な一つの命

これは、「命は大切」「命は世界中どこでも一番大切」「命は一番の宝物」など、命の存在そのものが大切であるとストレートに表現しているもの、「命は一人に2つない」「命が2つあったらみんな大切にしないから命は大切」「2つもあれば1回くらい死んでもいいやと思ってしまう。一つだから大切に生きる。」など、命は人間にとって唯一無二のものであり、それゆえに大切であるという考えを表現していたものである。

2) 授かりものとしての命

これは、命を神様などからの与えられたものとして受けとめていることを意味していた。「授かったもの、贈られたもの」であるから大切にしなければならないという表現が特徴であり、「神様からの授けもの」「神様がくれた贈り物だからせいっぱい生きて、命を大切にしたい」などの記述内容があった。

第2カテゴリー：生きている実感

このカテゴリーは、子どもが、生きていることをどのようなことで感じているかを表現していた

ものである。日常生活の体験から、生きていることを感覚的、感情的に受けとめているサブカテゴリーと、身体的な活動を通して生きていることを実感しているサブカテゴリー 1) 生きている感覚、2) 生きていることを意味する活動から構成される。

1) 生きている感覚

これは、生きていることを感覚や感情で表現しているもので、「生きているってしあわせ」「生きることはすばらしい」と感嘆的な表現や、「生きることは笑うこと」「生きることは怒ること」「生きることは楽しい」「生きることは喜び」「生きることの嬉しいこと、悲しいことなどいろいろある」など、生きることの喜怒哀楽を表現したものや「鬼ごっこして痛いと思った時」「お花を見てきれいだなって思った時」「星を見て微笑んだり、ホッとする時」「ご飯を食べておいしいと思う時」「色々なものを見てすごい、おもしろいと感じる時」など子どもが日常生活の体験から感じる気持ちや感情を表していた。さらに、「生きていることが不思議に思うときがある」「命がないと思うとちょっと嫌だ」などと表現している内容も含まれる。

2) 生きていることを意味する活動

これは、生きていることを日常的な活動や行動から表現しているもので、生きることは「友達と遊ぶこと」「勉強すること」など、学童期の子どもが、日頃の学校生活から生きていることを実感している内容であった。また、生きることは「歩くこと」「食べること」「しゃべること」「走ること」「ねぼけること」など日常の自分の活動や身体的な行動を通して生きることを表現していた。

第3カテゴリー：他者の死や存在を通して考える生・死

このカテゴリーは、子どもにとって身近な人の生や死から考えたものや日頃テレビ、新聞から情報として見聞きする飢餓、殺人、自殺などの事件を通して、自分とは異なる人々の状況から生や死を考えていたものであった。このカテゴリーは、1) 世界に生きる人々の生と死、2) 殺人や自殺への思い、3) 病気と死、4) 身近な人の生・死からの思いのサブカテゴリーで構成される。

1) 世界に生きる人々の生と死

これは、世界で起きている貧困や飢餓を通して生や死について記述したものである。「世界には食べ物も水もなく貧しい人がいっぱいいる」「世

界の子ども達は、食べられない人もいるのに私は
ぜいたくかなと思う」「世界には食糧難で亡くな
る人もいるんだと思った」などである。

2) 殺人や自殺への思い

これは、事件や自殺などの報道を通して子ども
が考える生や死について表現されたものであった。
「ニュースや新聞で殺された、亡くなったと聞くと
可哀想だなと思う」「こんなに恵まれているのに
若い人の自殺が増えている」「悪いことをして
いないのに殺される人、自殺する人もいるけどや
ぱり生きていくことはいい」「人殺しは絶対に良
くない」「人の命を殺しては絶対いけない」など
であった。

3) 病気と死

これは、病気ということに注目して表現されて
いたもので、「テレビで病気で苦しむ人がいて可
哀想だった」「ほとんどの人が病気で死んでいる」
「テレビで手術しても死んでいく人がいて家族が
悲しそうだった」などがあった。

4) 身近な人の生・死からの思い

これは、「おじいちゃんの死」や「家族と会えな
くなる死」「家族の死から生きることへの思い」
など身近な人の死を通して生への思いが表現され
ていた。「大好きなおじいちゃんが死んだ」「自分
も死んでしまったら、また、じいちゃんに会える
と思った」「死んでしまったら大好きな家族とも
会えなくなる」などがあった。

第4 カテゴリー：生や死への意味づけ

このカテゴリーは、命や生きることそのものが
どのような意味を持っているのかを子どもなりに
表現したものである。サブカテゴリーとしては、

- 1) 不可逆的な死、2) 存在することすなわち生、
- 3) 生きる意味から構成される。

1) 不可逆的な死

命と死の対比をしながら死の不可逆的な意味に
ついて記述しているもので、「命がないと死んで
いる」「命がないと死んでしまう」「死んでしま
うとまた生きられない」「命は寿命がくると消える」
「命がないと生きていない」「死んでしまうとまた
生きることはできない」などであった。

2) 存在することすなわち生

これは、命や生について存在するということから
意味づけているもので、「命がないと今ここに
いない」「生きることはこの世に存在すること」
「生きることは子ども、大人がいること」「生きる

ことは今ここにいること」など、存在そのものが
生きることを意味する表現であった。

3) 生きる意味

これは、生きることそのものを表現していたも
ので、「何をやっても生きることができないガン
の時、生きることは大変なこと」「生きること
って死ぬよりも大変なこと」などがあった。さらに、
「生きることは、自分のことだけでなく生物を
助けること」「生きることは、人々を助けること」
「生きることは社会に役立つこと」など、生きる
ことの意味を他者との関係からも表現しているも
のであった。

3. 実施後の記述内容の分析結果

ビデオ視聴後に「命や生きることについて」につ
いて感じたこと、考えたことについて記述した内
容を分析した結果、5 カテゴリーが抽出された
(第5～第9 カテゴリー)。5 カテゴリーおよび各
サブカテゴリーについては以下に記述した。抽出
過程は表3に示した。

カテゴリーおよびサブカテゴリー

第5 カテゴリー：死の不公平さへの思い

- 1) 良いことをしても、頑張っても死ぬ
- 2) 死ぬことへの恐れ・不安

第6 カテゴリー：いのちの大切さの再発見

第7 カテゴリー：生きることのすごさへの感動・ 発見

- 1) 生きることはそのものが役に立つこと
- 2) 生きることのすばらしさ
- 3) どんな状況でももてる生への希望

第8 カテゴリー：生きる姿勢

- 1) 考えさせられた生き方、生きる心
- 2) 人・動物にやさしくありたい、役立ちたい
思い

第9 カテゴリー：意図的な命の抹殺への憤り

- 1) 殺人への憤り
- 2) 自殺する人への憤り

以下に各カテゴリーの特徴を具体的データとあわ
せ述べる。

第5 カテゴリー：死の不公平さへの思い

このカテゴリーは、子どもたちがビデオの中で
自分のできることを見出し、それに対し懸命に努
力した主人公が、最後には死んでしまったこと
に対する気持ちとして表現されたものである。サブ
カテゴリーとして1) 良いことをしても、がんば

表3 実施後のカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
5. 死の不公平さへの思い	1) 良いことをしても、がんばっても死ぬ 2) 死ぬことへの怖れ・不安	<ul style="list-style-type: none"> ・いいことをしても死ぬ人がいる ・悪い人が戻るところ ・頑張っても死ぬ ・命がなくなるのは怖いこと ・死ぬことは悲しい ・なぜ重い病気になるのか
6. 命の大切さの再発見		<ul style="list-style-type: none"> ・命の大切さがあらためてわかる ・命は宝物 ・命は大切 ・生きることは大切
7. 生きることのすごさへの感動・発見	1) 生きることそのものが役に立つこと 2) 生きることのすばらしさ 3) どんな状況でも持てる生への希望	<ul style="list-style-type: none"> ・生きていることは自然に役立つこと ・生きることは勇気を与えること ・人に役立つすばらしさ ・生きていることのしあわせ ・生きることのすばらしさ ・生きつづけようとがんばる姿への感動 ・生きるっていいな ・12年も100年分の生 ・病気でもがんばるすごさ ・生きることは自分の勇気を試すこと ・いのちがあれば何でもできる可能性 ・病気になっても自分にも何かできる ・生きることは夢や希望をもつこと ・生きることはがんばれること ・生きつづけることを忘れない ・つらいことも生きる喜び
8. 生きる姿勢	1) 考えさせられた生き方、生きる心 2) 人・動物にやさしくありたい、役立ちたい思い	<ul style="list-style-type: none"> ・生きることを教えてくれた ・大切な生きる心 ・やさしい気持ちを持ちたい ・私も人の役に立ちたい ・ボランティアも大事なこと
9. 意図的な命の抹殺への憤り	1) 殺人への憤り 2) 自殺する人への憤り	<ul style="list-style-type: none"> ・殺すことはいけないこと ・生きられない人もいるのに自殺はいけないこと

でも死ぬ 2) 死ぬことへの怖れ・不安という2つから構成されている。

1) 良いことをしても、頑張っても死ぬ

これは、努力をしたのに報われなかったという思いを表現しているもので、死の持つ不公平さや不条理を表現していた。「なぜいいことをしても死んだのかわからない」、「あんなにがんばったのに死んでしまった」、「できるものなら生き返らせてあげたい」「悪い人が光に戻ってほしい」などであった。

2) 死ぬことへの恐れ・不安

これは、主人公の死を通して死を実感したもので、死を身近に感じ怖いもの、そうなったらどうしようなどの思いを表現していたものである。「命がなくなるってすごく怖いということもわかった」「命はなくなると死んでしまう」「家族が重い病気になったらどうしよう、ひとりになったら生きられない、生きていけない」などがあった。

第6カテゴリー：命の大切さの再発見

このカテゴリーは、命の大切さをあらためて感

じ、命は何にもまして大切なものという気持ちを表現したものである。ビデオ視聴前にも同様の記述として表されているが、「命の大切さがいっぱいわかった」「いのちがあるだけで幸せなことがわかった」「命の大切さあらためてわかった」などの「すごく」「あらためて」「本当に」などの感嘆の表現を付加して記述していることに特徴があった。

第7カテゴリー：生きることのすごさへの感動・発見

このカテゴリーは、主人公の生き方を通して生きることそのものについて子どもの考え、意味付けを表現しているカテゴリーである。その内容は、生きるすばらしさ、強さといったものを実感したものとして表現されている特徴がある。サブカテゴリーとして1) 生きることはそのものが役に立つこと、2) 生きることのすばらしさ、3) どんな状況でももてる生への希望から構成されている。

1) 生きることそのものが役に立つこと

これは、ビデオを通して主人公が人の役に立ち

たいという思いで行動したことに感銘を受けたことや主人公の生きる姿から生きることは人の役に立つことという言葉 키워ドとして生きることについて記述されていたものである。「自分以外の人に役に立つすばらしさ」「生きることは誰かの役に立つこと」「生きていくことは自然に役にたっていた」などがあつた。

2) 生きることのすばらしさ

これは、ビデオでの主人公の姿を通して生きることのすばらしさ、すごさを子どもなりの言葉で表現されていたものである。「生きつづけようがんばる姿に感動した」「命があればこんなこともできるんだと思った」「大人でもできないすごいことをしてびっくりした」「生きるっていうのがどんなに大切かわかった」「生きるということがこんなにすばらしいことと思った」「生きることは勇気を試すこと」などがあつた。

3) どんな状況でもてる生への希望

これは、命があり生きてさえいれば、どんなことでもできる可能性があるという希望や前向きな思い、たとえ死んでも他の人の心の中に存在しつづける事を表現したものである。「障害を持っていても生き物の命を救ったりできると思った」「重い病気でも励ましあいながら生きていく」「病気がなっていたのに一生懸命がんばっていたところがすごかった」「12年しか生きられなかったけど100年分がんばった気がする」「自分が病気になってもたかし君みたいにになれるんだと思った」「なくなってもちゃんと心の中にいる」などがあつた。

第8 カテゴリー：生きる姿勢

これは、ビデオを通して子どもなりに生き方、生きる姿勢について考えたことや自分もこうありたいという思いを表現したものである。サブカテゴリーとして1) 考えさせられた生き方、生きる心、2) 人・動物にやさしくありたい、役に立ちたい思いの2つから構成される。

1) 考えさせられた生き方、生きる心

これは、主人公の姿から生きる意味や生き方への姿勢を表現しているものである。「生きる大切さを教えてくれた」「生きつづけるということを忘れないと思った」「いっぱい生きるっていっぱい喜び、つらいときもあるけどその喜びでできる」「どんなことがあっても生きていけばいい」「自分からやろうと思う気持ちが大切」「宝物だというくらい命を大切に生きていきたい」などがあつた。

2) 人・動物にやさしくありたい、役に立ちたい思い

これは、自分自身もこうしていきたい、ありたいという自らの姿勢を表現したものである。「私もやさしい気持ちを持ちたい」「人にやさしくしてあげようと思った」「私も人や動物にいいこといろいろしたいなと思った」などであつた。

第9 カテゴリー：意図的な命の抹殺への憤り

自殺や殺人により意図的に命がなくなる行為や状況に対する思いを表現したものである。サブカテゴリーは、1) 殺人への憤り、2) 自殺する人への憤りから構成される。

1) 殺人への憤り

これは、日頃安易に「殺す」などの言葉を使うことに対する憤りを表現したものである。具体的記述内容は、「殺してやるとか平気で言っている人がいる、どうしてそういうこと言うんだろう」「絶対こらすなんて言いたくない」などである。

2) 自殺する人への憤り

これは、自ら命を絶つことへの憤りを表している。「みんな命を大切にしているが、自殺するばかりがいる」などであつた。

V. 考 察

1. Death Education 実施前後の変化と特徴

抽出されたカテゴリーから前後での特徴を検討すると、実施前の第1 カテゴリー「かけがえのない命」は、命の大切さを表現しているもので記述数も多かった。しかし、これは命について問われ、「命は大切なもの、一つしかないもの、神様からの贈り物」といった観念的な範囲で命の大切さを記述していたといえる。また、第2 カテゴリー「生きている実感」では、生きている、生きるということについて「生きることはしあわせ、すばらしい」「生きることは笑うこと…」など生きることを感覚的に表現したり、「生きることは食べる、走る…」「ご飯をおいしいと思う時」「…痛いと思う時」など、日常生活行動や日常の具体的な生活体験を通して感じる気持ち、感覚から生きている実感を表現していた。

これらに関連する記述を実施後でみると、実施後の第6 カテゴリー「命の大切さの再発見」は、「命の大切さ」を表したものであり、「あらためて大切さを感じた」「本当に大切」「すごく大切」と

いう感嘆的な修飾語を付加して記述しているのが多かったことが特徴的であった。さらに実施前には生きていることの記述を日常的な具体的な現象から表現していたものが多かったが、実施後は第7カテゴリー「生きることのすごさへの感動・発見」として抽出された記述が多くなった。これは、生きることそのものが、他者に影響を与える意味を持つこと、生きることのすごさや力強さというものを実感したというものや、生き続けることの意味や生きていくことそのものに生への希望や価値を見出していたことが特徴であった。さらに自分自身がどのように生きたいか、人に対してどのようにありたいかなど人としてのあり方や姿勢にまで言及していた第8カテゴリー「生きる姿勢」は実施前には見られなかったものであった。これらは、ビデオの主人公の生きる姿を通して、主人公である少年が死ぬという現実の中からも「いのちの意味」を考える機会になったことが伺える。近藤¹⁰⁾は、10歳頃からはいのちの教育にとって重要な時期であると指摘する。それは、この時期人間とは何か、生とはなにか、どのように生きていこうかなど根源的な問いに自問自答し始める時期であると述べ、いのちの教育の骨格をかたちづくるプロセスは、「いのちの体験」を子ども自身が正面からとらえること、その時誰かとその体験を「共有」すること、その中で根源的な問題に答えを出せずに棚上げする段階も見守り待つことであるとしている。そして、頭で理解する、また説明してわからせることができないものがある、いのちの意味を問うということはまさにそういうことではないかと述べている。子どもは、これまでもいのちは大切、大事にするものということは様々な場面で聞く機会があり、このことについては、子ども自身も納得し理解していたことも確かであろう。しかし、死を迎えざるをえなかった主人公の姿から命の意味や生きる価値について子どもは改めて考える機会になったと考えられる。

また、実施後の第5カテゴリー「死の不公平さへの思い」は、死の不公平さ、死への恐れ・不安の記述であり、「自分だったら・・・」など自分に引き寄せたものとして表現されていた。これは、ビデオの中で同世代の子どもの死を体験したことで死が自分の身近にも起こることとして感じた結果と考えられる。また、この年代の特徴として、原因・結果の因果関係も単純なとらえであること

から死を単純に懲罰的なものとしてとらえ、死は不当なもの、良くないこととしてみる傾向があるため、「いい事をしたのに…」、「病気なのになんばったのに…」という死の不公平さ、不条理さを強く感じている記述が見られたのも特徴的といえる。これらは、死の本質の一つである普遍性、不可避性を直視する結果となったといえる。カストロ¹¹⁾は、8、9歳頃より子どもは死の不公平さを気にかけるようになり、死を不当なものとしてとらえる傾向がみられると述べ、このような状況に対しては死に至る条件などを客観的に丁寧に説明することで子どもがより深く考える機会になると述べている。また、少数であるが、死への恐れや病気になることへの恐れなどを表現したものもあった。細谷¹²⁾は、子どもに死を伝えることは、死とは何かまで言及する必要があると述べている。子どもに死を語る時、死の恐怖や不安だけを残すのではなく、子どもにとって恐怖を超えて、死から生の意味を考えていくことができる働きかけや対話もあわせて必要になることが示唆される。

実施前の記述には、第3カテゴリー「他者の死や存在を通して考える生・死」のように生や死を貧困や飢餓による死、病気による死などから考えているものも少なくなかった。これらは、子どもが、大人が考える以上に生や死への関心が高く、生や死の問題に様々な点で関心を持っていることを伺わせるものであった。しかしその内容は、メディアからの情報を中心として、「そういう人々がかわいそう」というものが中心で、死は自分の身近なものというよりは遠い存在であり、自分には遠い出来事として考えていると思われた。現代社会の中では、子どもの生活から死は身近なものとして存在することが少なくなり、メディアなどの媒体を通して知るものとなっていると言われている。しかし、子どもは、メディアからの情報にも十分な関心を持っており、子どもと語り合う機会を意識的にもつことで子どもと語り合う場は意外と身の回りに多いとも言える。実施後に社会で起きている出来事への関心は第9カテゴリー「意図的な命の抹殺への憤り」としても現れ、生きてくても生きられない人がいることに言及し、だからこそ殺人や自殺は良くないこと、命を粗末にすることのないようにという表現へと変化していた。これら前後のカテゴリーの変化からみると、子どもたちがビデオを通して自分と同じ年代の子の生

きる姿や死の事実を見ることで、遠い世界の出来事であった生や死が、自分と同じような者にも起こりうるものとして、身近に存在する生や死であることを実感したことが伺えた。

今回の教材では、主人公は、最後は亡くなったが、子どもたちは亡くなったことそのものに注目し、死への恐れや不安を増大させたというよりは、その生き方や死ぬまでががんばった姿に注目し生きる意味や人間の可能性にまで注目したいことが特徴的といえる。また、子どもたちはその姿を通して、自分が病気になってもこのように生きられる、がんばることができるといった予期的学習もあわせてしていた。生や死の問題に対しても本質をつかみとる子どもの力をあらためて感じたとともに、子どもと、生きること、死ぬことについて語り合うことの必要性を改めて認識した。「死の不公平さや死への恐れ」といったものを記述した子どもと機会をつくり時間をかけて一緒に語り合う場も大事であると考えた。

2. 小学生における死の準備教育

子どもへの Death Education が、個々の努力によって行われるのみで系統的に教育現場でも進んでいかない理由を、村井¹³⁾は、一つは大人や教師が、「死」は知の対象ではなく、「死について考えても仕方がない」と考えているからであること、2つ目に大人や教師の内面にも死に対する恐怖があり、死について語りたがらない、語ろうとしない「死のタブー」が形成されているからであると指摘する。著者らの調査¹⁴⁾では小学4～6年生でペットや身近な人との死別体験は7割前後の者が体験していると答えているが、家族と死について話したことがあるものは4割弱であり、年齢が進むにつれ話したことがあるという経験は減少する傾向があった。上菌¹⁵⁾が行った調査でも、ペットとの死別体験は7割を超えるが、死に関わる質問をしたことがあると答えているものは1割前後であると報告しており、経験していてもそのことを語りあったり、尋ねたりする経験は少なく、死について、タブー視されており子どもが尋ねにくいことが影響していると指摘する。今回の実施前の記述内容にも身近な祖父の死の体験についてそのときの思い、現在の祖父への思いを記述しているものがあつた。子どもは、機会があれば自分の体験したことや思いを表現したり、語ることを望んでいることが推察された。子どもにとっても生や

死についての問題は、生きていく中で当然向き合うことの多い問題であるにも関わらず、一緒に語り合う、一緒に悲しみを共有するなどの場が多いとはいえない現状といえる。これらを考えると、先に述べた近藤¹⁶⁾のいのちの教育に関する考察が改めて問われるであろう。

今回の教材は、小学4～6年生を対象に考えたものである。ピアジェの認知的発達段階でいえば具体的操作段階後半の時期に位置する事、また、死の概念については、死の不可避性、普遍性、不可逆性などを理解する年齢といわれ、さまざまな体験を自分のものとして取り込むためには、どのような体験をするのかが影響するといわれている。そこで、今回は特に子どもたちにとって身近な出来事と感ずることができると念頭に置き教材を検討した。先に述べたように実施前後の記述内容を分析した結果、今回の教材は、子どもたちにとっては生や死を身近な問題として考える機会にはなつたことが伺われた。これは主人公となつた少年が子どもたちと年齢が近いこと、日常の学校生活の中での様子がえがかれていたことで身近に感じ実感して考えることになつたと考えられる。今回は、教材に対する子どもたちの反応等も知るために、実施前後で子どもたち一人一人が考えたことを記述する方法とした。しかし、今後は Death Education の方法として子どもと大人が、また子ども同士が感じたことなどを語り合う、気持ちを共有することを通しての生や死を考えるとこの教育のあり方の検討が必要である。

村井¹⁷⁾は、死にゆく人々との対話が生きていく者に与える教育的インパクトの意味から子どもと死にゆく人々の出会いの場を広げていくことの必要性を述べている。それは、生きていく人々は「生」の意味を学び、死にゆく人々は自分の経験が共有されることで孤独と恐怖が少なからず癒される意味があると述べている。今回の教材は、子どもにとって身近な存在であることに加え、病気を抱え死に至つた主人公の少年の生き様を通して子どもたちが、生きる意味や希望、自分が病気になつてもこのように生きればよいのだという思い、自分はどのように生きていきたいのかを考える機会になつた。但し、死にゆく人々との対話というあり方に関しては、教育として何のために、どのような方法が望ましいのかを検討する必要がある。体験者の話を聞かせればよいというような方法論

だけに走ることは危険であり、子どもが出会うということは、これらの問題そのものの意味を語る人自身が模索していることが大事になる¹⁰⁾との指摘がある。

生や死の問題について子どもたちが考える力を持っていることを今回の子どもたちの反応から考えさせられた。小澤¹⁹⁾らは、小児がんの子どもを対象に真実告知 (truth telling) をされた場合と告知されなかった場合の心理的影響を調査しているが、告知群が、治療前後での適応度、精神的エネルギーを十分に保っていることを報告している。子どもの理解度、精神状態を十分考慮しながら様々な場面で生や死の問題を子どもと語り合っていくことは、子どもの発達にとってプラスの要因として働くことはあってもマイナスの要因になることは少ないといえる。生や死の問題を子どもとともに考える機会を日頃から持つことは、病気や死に至る病を持つ子どもたちと向き合う場を考えてもその臨床的意義は大きい。生や死の問題は、子どもにとっても発達上欠かせない課題の一つであり子どもたちとこれらの問題を共に考える機会を持つことが重要である。

VI. 結 論

小学4年生を対象とした Death Education の内容は、子どもにとって身近な問題として考えられる教材であることが重要となる。結果からは、子どもは生や死の問題に何らかの関心を持っていること、子どもが死から生へと考える力を持っていること、他児の体験を通して病気になったときのことも含めて予期的学習の機会になっていたことが確認された。今回の対象者は、地方都市における小学校1校において実施されたものであり、結果の内容をすべて一般化することには限界があるが、今回の結果を踏まえ、さらに子どもとの双方向で考えていける Death Education のあり方の検討を進めていくことが必要である。

VII. おわりに

子どもを取り巻く社会は、生や死の問題を身近な問題として考える機会を失っていることが指摘され、様々な事件も後を絶たない現状である。今回、子どもへの Death Education の具体的方略

の検討と実践まで行えたこと、さらにその内容を子どもたちの反応から検討できたことことは大きな意義があった。多くの病気の子どもたちを見送ってきた筆者らにとって課題であった Death Education を、今後も子どもを取り巻く人々と共に継続的に検討を進めていきたい。本研究にあたりご協力頂きました小学校の教員の皆様、一緒に真剣に取り組んでくれた子どもたち一人一人に心から感謝申し上げます。

本研究は、平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究C(2)(研究代表者岡田洋子)の助成を受け実施した報告書の一部に加筆検討を加えたものである。尚、本研究における Death Education は、小学2年生、中学2年生においても教材を検討し実施・評価を行っていることを付記する。

引用文献

- 1) 富田和巳：社会面から見た子どもの死の現状、小児看護、21(11)、1497-1500、1998.
- 2) 岡田洋子他：子どもの「アニミズム・死の概念発達」と生活体験—Death Education の方略を求めて—、平成10～12年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書、2001.
- 3) 岡田洋子：学童期にある小児の死の概念発達に関わる要因の検討、天使女子短期大学紀要、11、21-36、1990.
- 4) Heegaard M: When Someone Very Special Dies,1988. 清水恵美子訳：「さよなら」を大切な人にいうんだ、法蔵館、2001.
- 5) Boulden J: Saying Goodbye, 1992 . きたやまあきお訳：「さよなら」っていわせて、大修館書店、1997.
- 6) Brown LK,Brown M: When Dinosaurs Die, 1996.
高峰あずさ訳：「死」って、なに?—かんがえよう、命のたいせつさ—、文溪堂、1998.
- 7) 日下義明：「死の教育」の試み、現代のエスプリ、349、39-47、2000.
- 8) 西本義之：「死」を考える学習、現代のエスプリ、349、48-57、2000.
- 9) 金光一彦：『いのち』と向き合うことは、現代のエスプリ、349、58-67、2000.
- 10) 近藤卓：いのちの教育、思春期学、21(1)、65-6

- 9、2003.
- 11) Castro D: La Mort Pour de Faux et La Mort
Pore de Vrai, Alban Michel, 2000.
金塚貞文訳：あなたは、子どもに「死」を教えられますか？、40-43、作品社、2002.
- 12) 細谷亮太：小児の死－ケアとエデュケーション－、
思春期学、21(1)、61-64、2003.
- 13) 村井淳志、Ⅲいのちの授業をつくる、金森俊朗、
村井淳志：性の授業 死の授業、198-199、教育史料出版会、1996.
- 14) 前掲2)
- 15) 上蘭恒太郎：子どもの死の意識と経験、長崎大学
教育学部教育科学研究報告、51、15-25、1996.
- 16) 前掲10)
- 17) 前掲13) 203
- 18) 座談会：生と死から学ぶいのちの教育、現代のエ
スプリ、349、5-38、2000.
- 19) 小澤美和：小児がん患者への真実告知の心理的影響、日本小児科学会誌、102(9)、990-996、1998.